

第 14 回 日本がん・生殖医療学会学術集会

01-02

水戸、2024. 2. 10-11

がんの化学療法が妊孕性温存療法の臨床成績に与える影響

真柄怜央¹、井谷裕紀¹、水野里志¹、藤岡聡子¹、辻 勲¹、福田愛作¹、森本義晴²

¹IVF 大阪クリニック、²HORAC グランフロント大阪クリニック

目的 がん治療に用いられる化学療法は性腺毒性により妊孕性を低下させるが、原疾患治療に時間的猶予が無い症例では、妊孕性温存療法前に化学療法の先行が止むを得ない場合がある。本研究では化学療法とその実施回数が妊孕性温存療法の成績に与える影響について比較、検討を行った。

方法 当院にて 2021 年に顕微授精を実施した 30 歳未満の不妊治療患者 31 症例 34 周期（対照群）、2006 年から 2022 年の間に妊孕性温存療法前に化学療法を行った 30 歳未満の 9 症例 14 周期（化学療法群）を対象とし年齢、AMH 値、採卵数、卵成熟率を各々比較した。又、妊孕性温存療法前に化学療法を先行した患者の内、実施回数 1 クール群（6 症例 9 周期）と 2 クール以上行った複数クール群（9 症例 10 周期）の 2 群に分け、採卵数及び卵成熟率を比較した。

成績 対照群と化学療法群の年齢、AMH 値、採卵数、卵成熟率は 27.4 ± 1.6 vs 22.6 ± 3.61 歳, 4.13 ± 2.81 vs 0.8 ± 0.76 ng/ml, 15.6 ± 10.0 vs 7.6 ± 6.2 個, 79.0 ± 27.8 vs $76.4 \pm 27.6\%$ であり、化学療法群の年齢、AMH 値、採卵数は対照群に比べ有意に低かった ($p < 0.01$)。治療クール数の比較において、1 クール群と複数クール群の採卵数と卵成熟率は、 4.7 ± 3.4 vs 8.0 ± 7.8 個, 88.1 ± 17.3 vs $83.3 \pm 22.2\%$ であり、両群間に差は無かった。

結論 化学療法群の年齢が対照群と比べ若いにも関わらず、AMH 値は低く、採卵数も少なかったことから、化学療法が妊孕性に影響を及ぼす可能性が示された。また、化学療法を先行した場合、クール数による採卵数、卵成熟率に差は無かったため、妊孕性温存療法は化学療法前に実施すべきだが、化学療法の先行が必要な症例でも、主治医の許可・患者の希望があれば、化学療法既往実施回数に関わらず、妊孕性温存療法を試みる事が望ましいと考えられた。